

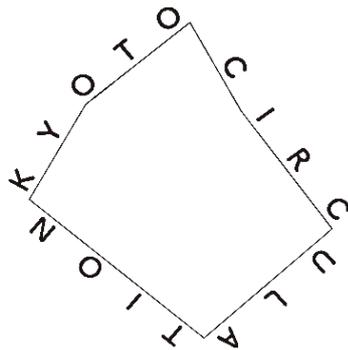
はじめに

「CIRCULATION KYOTO」とは

「サーキュレーションキョウト」とは、京都市の東部・呉竹・西・北・右京の各文化会館とロームシアター京都、京都市が主催に、応募で集められた約40名が主体となり開催されるプロジェクトです。各地域(主に「洛中」に対する「洛外」)を円をつなぎ、そこから地域を眺めることで見えてくる新しい“京都ローカル”を探りながら、各地域に最適な“メディア”を構想・制作することを目的に、地域のリサーチやメディアづくりの講座を受けながらプロジェクトを進めています。東部(山科)メンバーは、会社員、デザイナー、会社経営者、学生、主婦など9名で成り立つチームです。主に山科近隣(京都市内・滋賀など)に住む私たちは、生活者として見る山科の課題や疑問に向き合い、それぞれのノウハウやアイデアを活かし、私たちが山科の中で出来ることを探りながら、地域の見方が変わるようなメディアづくりを目指しています。

* 編集日誌なども随時更新中 <http://circulation-kyoto.com>

主催：公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団(ロームシアター京都、京都市東部文化会館、京都市呉竹文化センター、京都市西文化会館ウエスティ、京都市北文化会館、京都市右京ふれあい文化会館)、京都市



まちの見方を180度変える ローカルメディアづくり

CIRCULATION KYOTO

サーキュレーション キョウト

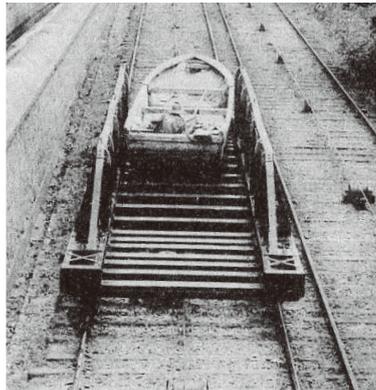
「通過の街、山科」

私たちがリサーチを通して見つけた地域のテーマは、「通過の街、山科」です。
このテーマを山科の特徴であり課題と捉えています。

山科の通過事情 昔



拾遺都名所図会 (1787年)



街道や琵琶湖疎水、鉄道などに見られる、洛中を中心としたインフラ整備において、山科は昔から「いかに効率良く通過するか」という観点からみられていた。

今



住みたい街の上位にも挙がる「滋賀県」と、随一の観光都市でありながら産業・大学都市でもある「洛中」に挟まれた山科は、通勤・通学者にとっての通過点。JR琵琶湖線・湖西線、京阪、地下鉄が乗り入れる、ターミナルとしての役割を果たしている。

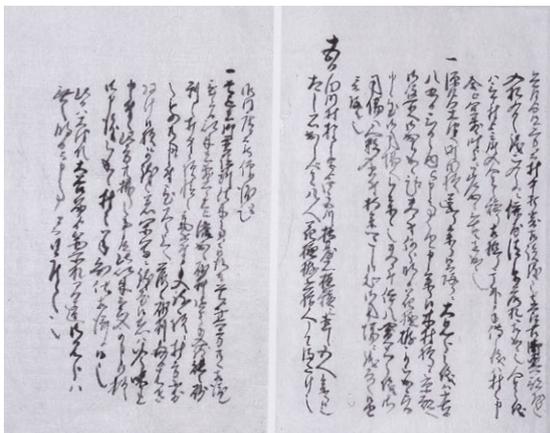
「通過を助けてきた街、山科」

通過されてきた山科、しかし、その裏側には通過を助けてきた山科の姿もありました。当時を生きる先人たちの知恵・営み・思いが、今も土地に根付いているのではないのでしょうか。



中世

山科には、「山科金屑丸」という秘薬が伝わっていたという話がある。それは正和2年(1313)に牛尾山に住み着いた大蛇を、内海景忠という武士が退治した「大蛇退治伝説」に関係するものとして、内海景忠の病気を治したと言われる秘薬が「金屑丸」であったとされる。その「金屑丸」は内海家(あるいは四手井家)にのみ作り方が伝わっており、やがて山科の各地に伝わり、明治の初め頃まで東海道(旧三条通り)沿いの御陵「すずめ坂」あたりで旅人たちに販売されていたらしい。



近世

江戸時代、大津港に荷揚げされた物資を京都方面に運ぶ街道整備の痕跡として、今でも山科には「車石」が現存している。その当時の資料には、整備された街道の日々のメンテナンスや掃除方法が記されており、さらには通過する人々を癒すための花壇の設置などもおこなわれていた。また、明治に入って進められた鉄道の開通においても、時折止まってしまう列車を人力で押して助けていたという話もある。



現代

テクノロジーの進化などにより、生活はますます便利になり、現在の通勤・通学においては利便性や効率性だけが重視されつつある。本来なら存在する「通過を助ける」「通過を助けられている」という人々同士の関係も希薄になるどころか、気づくことすら難しくなっている。私たちはこの関係性(メッセージ)を、地域(山科)から掬い上げることで、通過者(外の人)が、地域(山科)にコミットし、新しいコミュニティを持つことを可能にするメディアの構想を試みたい。

「通勤・通学者を助ける薬」

山科が通過する人たちを助けてきた歴史や文脈を現代に読み替え、通過する多くの働く忙しい人たちを助け・応援する広義の「薬」を山科から提案・提供したいと考えました。山科に伝わる「くすり」を募集・リサーチにて集め、それらをより面白く、ユニークな形やアイデアで発信していきます。まずは「通過の街、山科」から「通過したくなる街、山科」へと、通勤・通学者の意識が変わるメディアづくりを目指します。

Q・山科に伝わる“くすり”とは？



「薬みくじ(しなぽおしょん)」

プラン1は、地域の方々の人生経験から学ぶ教訓やアドバイスをダイレクトに通勤・通学者に届けるために考案された、薬型のおみくじです。通勤・通学者にとって「言葉が助け(薬)になる」というコンセプトにて、これまで交わることのなかった、地域と通勤・通学者をつなぐ仕組みを作り出します。



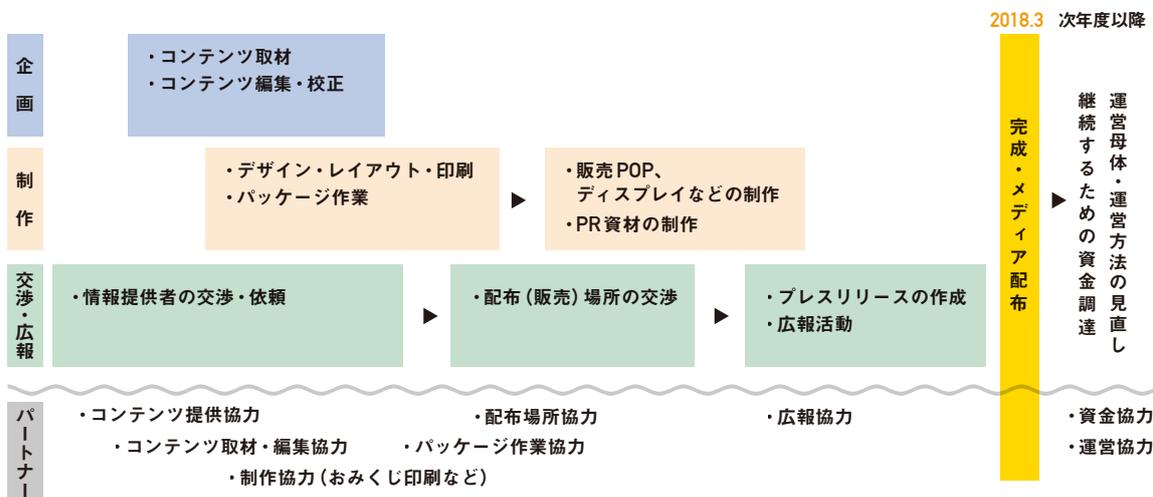
薬みくじイメージ



ロゴ案:薬の意を持つ「ポーション」(あるゲームでは回復アイテムとして登場)と山科の「科」・関西弁である「行きしな、帰りしな」をかけた造語

薬型カプセルの中におみくじが入ったもの。神社で引くおみくじに記載されている助言が、地域の人々の教訓や人生のアドバイスを元にした内容になっている。山科の人たちがつくる、オリジナルみくじは、全100番(100人の人にアンケート・インタビュー形式で集める予定)までを作成。項目の中には、山科おすすめのスポットなどを紹介する項目をつくることで、地域そのものに関心を持ってもらうきっかけとなる。

●運営・実施方法

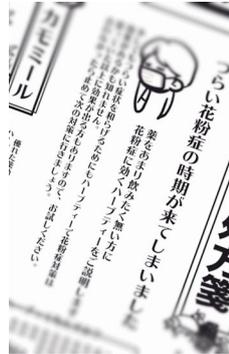


「処方箋読み物(スギサル錠)＋グッズ」

プラン2は、実際に通勤・通学者にとって役立つ情報を掲載した読み物と、その内容に付随したグッズを処方箋袋に入れたメディアを想定しています。地域から通勤・通学者を助ける「薬」となる物事をリサーチ・取材し、季節に合わせたセルフケアのための内容を盛り込むことで、山科を通過する人が、「心も体も元気になる」といった効果を期待できるメディアです。



処方箋袋デザイン



読み物イメージ

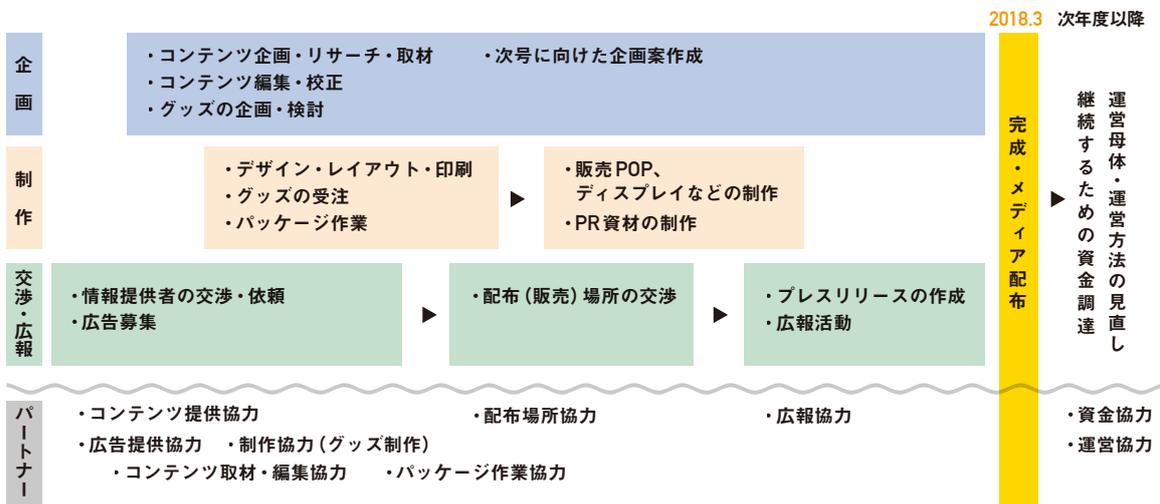


付属グッズ案(ハッカ油スプレーマスク)

通勤・通学中に読めるものを、テーマ(下記参照)に沿ったコンテンツで記事を作成、ペーパーメディアにて季刊誌(年4回)を処方箋袋に入れて発行する。袋の中には、セルフケアなどに役立つ、リフレッシュのためのハーブティーや虫除け効果のある匂袋など、特集記事に合わせたグッズがつくようになっている。

◎コンテンツ内容 「言葉が薬」をコンセプトとした内容(プラン1のおみくじ内容のピックアップ)、自然療法を取り入れたセルフケア、役立つ野草の紹介(風邪予防や花粉症予防などを特集)、歴史・都市伝説を元にしたエピソード(山科に伝わる自然療法・山科金屑丸など)、地元のおばあちゃんの知恵袋など、通勤・通学者に向けて、「薬」になりそうなものを幅広く取り上げる。*ハーブを使用した自然療法はセルフケアとして注目されており、実際にストレスの軽減や集中力の向上など通勤者にとっての助け(元気になる)影響を与えられるのではないかと。特に山科には日本新薬のハーブ館や薬科大、花と緑が豊かなまちづくり政策、農業などに携わる生産者など、「ハーブ」や「薬草」、「自然療法」には関わりを求めやすいと考える。

●運営・実施方法



*プラン1に比べ、継続的なコンテンツ企画・取材が必要になってくるため、他機関との連携・協力がより必要になる。資金面では販売での収入を見込んでいるが、地域活性・メディア普及を目的としているため、その他の収入源を検討したい(スポンサー交渉・広告収入)

事業プラン3

「プラン2+体験」

プラン3では、プラン2のメディアと組み合わせ、実際に山科に立ち寄ってもらい、地域と直接的な関わりを持つことのできるイベントを開催する。山科を通過していた人々が山科を目的地にするといったアクションを起こし、さらには地域に新しい拠点が生まれることになる。



出典：www.photo-ac.com



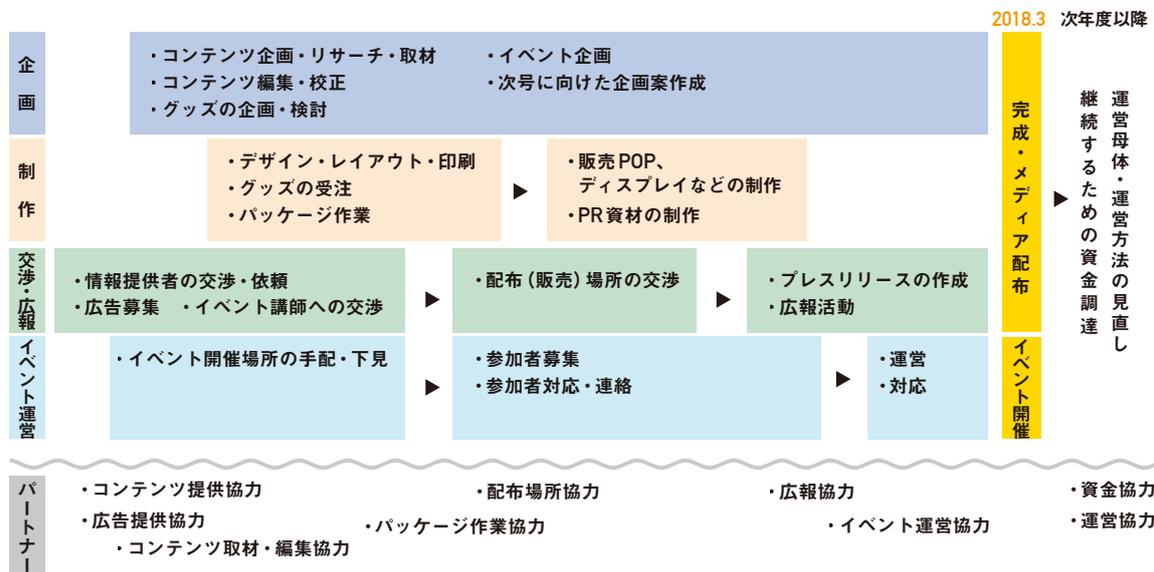
出典：www.flickr.com

イベントは、主にプラン2のコンテンツ内容を実際に体験してもらえるような内容を想定。オリジナルハーブティーづくりや、ハーブ(オイル)などを使った足湯や芳香浴、スプレーづくり(虫除けスプレーや化粧水)、料理教室などを開催する。また、山科に所在する京都薬科大や日本新薬ハーブ館の見学なども行なう。

◎オプションプラン

山科駅の特定の場所が、癒しの香で包まれるような仕掛けをおこなう。一部車両や、乗り換えスポット、駅前で使用できるコインロッカーなど、通勤・通学者が必ず利用する場所に新たな場にする仕掛けを生み出す。山科=いい匂いがすると、嗅覚に訴え、通勤・通学者を癒すための拠点づくりとして、新たなコミュニティを生み出す。

●運営・実施方法



* イベント参加費が活動費に計上されるプランではあるが、イベントをおこなう上での人員募集や対応を行う事務局の開設(活動拠点)を検討する必要がある。

期待される効果

- **メディアを活用することで、
通勤・通学者が元気になる（癒される）**
- **日々の通勤・通学が楽しく変化する**
- **山科の活動や地域に潜む情報などを
広く知ってもらうことで、
地域の魅力に気づいてもらう**

